＜論文＞

幼児の情動制御と出生順位

Emotion regulation among young children based on birth order

中　道　直　子[1)]　　佐　藤　佳　奈[2)]

Naoko NAKAMICHI and Kana SATO

Abstract

The present study investigated differences in young children's emotion regulation based on birth order. A disappointment paradigm was used to examine expressive control in 42 children (5-6 years old). The present study found no difference in the frequency of negative facial expressions between the firstborn children (n=22) and the second-born children (n=20) in a disappointing situation. When receiving an unexpected unattractive toy, the firstborn children displayed a neutral facial expression more frequently than the second-born children and the second-born children displayed a positive facial expression more frequently than the firstborn children. Results show that first- and second-born children differ in the manner in which they regulate their emotions.

Keywords : *Emotion regulation, Birth order, Young children*

Ⅰ．問題・目的

人は日常生活の中で様々な情動を体験する．その情動は，ある状況では素直に表出することが求められ，別の状況では表出すること自体や表出の仕方などを制御することが求められる．例えば，他者と喜びを共有したいときにはそれをありのままに表出することが，人間関係の悪化を防ぐためには強すぎる怒りを抑えることが，そして期待外れのプレゼントをもらった時にはがっかりした気持ちを隠す（もしくは喜びを表出する）ことが必要とされる．このように，目標を達成するために，自身の情動的な反応をモニタリングし，評価し，修正する過程のことを情動制御（emotion regulation）という[1)]．

どのように情動を制御するのが適応的であるのかは，相手との関係性，自分と相手を取り巻く環境，自分の精神的健康状態などによって異なる[2)]．いつでもありのままに情動を表出してしまうことは，他者との調和的な関係を構築できにくいという点で適応的ではないし，自分の情動を一貫して抑え隠すことは，自身の精神的健康を損ない得るという点で適応的とは言えない．Briges, Deham & Ganiban[3)]は，適応的な情動制御とは，環境の変化に合わせて柔軟に反応できることであると述べている．

種々の適応上の問題を抱えている幼児は，適切に情動を制御することに困難さを示す．例えば，Cole, Zahn-Waxler, & Smith[4)]は，情動制御課題において，期待外れの景品を渡された時に，問題行動のリスクの高い男児は低い男児に比べて，実験者在室時に多くのネガティブ情動を表出し，問題行動のリスクの高い女児は低い女児に比べて実験者不在時にネガティブ情動を表出しにくいことを示した．なお，情動制御課題とは，助手によって呈示された８つの景品を好きな順番に並べた後，幼児は実験者から無関係の認知課題を実施され，そのご褒美として最も望まない景品を実験者から誤って渡されるというものである（最終的には望んだ景品が贈られる）．このように Cole et al.[4)]の研究結果は，性別によって様相は異なるものの，問題行動のリスクの高い幼児が，実験者に対して怒りの情動を表出しやすい，もしくは実験者がいない場面でさえも情動の表出を抑制してしまうなどのように，情動を適切に制御することに困難さを持つことを示している．

情動制御が，幼児の別の重要な適応指標である仲間からの選好と関連することを示したものとして，中澤・竹内[5)]の研究がある．中澤・竹内[5)]は，５－６歳児を対象に，情動制御課題と肯定的指名法（クラスメイトの中から一緒に遊びたい友達を３人選ぶ）を実施した．

１）日本女子体育大学（准教授）
２）バディ企画研究所（講師）

その実験の結果，誤った玩具を手渡された期待外れの場面において，仲間からの指名数が多かった人気高群では，全体的にネガティブな情動よりポジティブな情動を表出することが多かった．さらに，仲間からの指名数が少ない人気低群は人気高群より，実験者在室時にネガティブな情動の表出が早く，また表出の頻度が多く，表出時間が長い傾向にあった．このように中澤・竹内[5]の結果は，仲間から人気が低い子どもは，ネガティブ情動を他者がいる社会的な場面で抑制しにくいことを示している．

上記のような情動制御の個人差は，神経生理的システムや気質などの幼児自身の内的な要因だけでなく，養育者の働きかけなどの外的要因によっても生じるようである．例えば，Berline & Cassidy[6]は，自身の子ども（3－4歳児）の情動表出を良く統制すると報告した母親の子どもは，イライラさせるようなゲームで怒りの表出を抑制しやすいことを示している．

本研究では，幼児の情動制御の個人差をもたらしうる間接的な要因の1つとして，彼らの出生順位について検討する．出生順位とは，当該家族において，その子どもが何番目に出生したかを表す数値である[7]．出生順位は，家族内での地位や役割を規定するだけでなく，養育者の役割期待や養育態度の差をもたらし，結果的に子どもの性格や行動の差を生じさせうるものであると考えられてきた[7]．

出生順位による子どもの行動特徴の差を検討した研究として，依田・深津[8]は，小学校4年から中学校2年生の2人きょうだいの子どもと，その母親を対象に，ある行動特徴が2人のきょうだいのうちのどちらにより当てはまるかを質問紙によって尋ねた．その結果，長子的特徴として，自制的，慎重，ひかえめ，親切などがあげられ，次子的特徴には，多弁，あまったれ，強情，依存的，嫉妬，快活などがあげられた．さらに，依田・飯島[9]は，小学5年生の児童とその母親を対象に，1963年に行ったものと同じ調査を行った．1963年と1981年の調査で共通していた長子的特徴の項目は，自制的，ひかえめ，仕事がていねい，話すより聞き手，めんどうが嫌いの6つであり，20年経っても長子が自制的であることに変化はなかった．

このように，依田ら[8][9]の研究は，次子より長子が自制的であることを示してきた．しかしながら，質問紙を用いた依田らの研究結果には，子どもに対する養育者の役割期待などが含まれている可能性があることに注意しなくてはならない．例えば，長子には次子より自制的であって欲しいと期待している場合には，養育者はアンケートに事実以上のことを記入してしまうかもしれない．調査対象者の反応の客観性が保証されにくいことは，質問紙法の持つ短所の1つである[10]．そこで本研究では，客観的な測度としての情動制御課題を使用することで，長子が次子より自制的であるのかを検討することとした．上述の依田ら[8][9]の研究結果や，「自制」という言葉が一般的に自分の感情や欲望を抑えることと定義されていることを[11]を考慮すれば，本研究においても長子は次子よりも情動の表出を抑制する方向で制御を行いやすいと予測される．

上記の目的のために，本研究では5－6歳児を対象に，助手と実験者の入れ替わりのない情動制御課題を実施した．従来の情動制御課題では，幼児が好きな景品の順位を教えた人（助手）と，景品を渡してくれる人（実験者）が異なっていたため，間違った景品を渡されたことを実験者に指摘しにくい構成になっていた．また，中澤[12]の調査では，日本人幼児は米国幼児より情動を表出しにくいことが示され，この手法では日本人幼児の情動制御の個人差を上手く測れない可能性が示唆された．そのため，今回の実験では，実験者の入れ替わりをなくし，日本人幼児でも，間違った物が渡されたことへの主張や，ネガティブな情動の表出をしやすいようにした．なお，本研究では，中澤・竹内[5]と同様に，参加児に景品を渡すのではなく，好きな玩具で遊ばせてあげることをご褒美とした．この方法でも日本人幼児の情動制御の個人差を測定できることが中澤・竹内[5]の研究により確認されている．

II．方　　法

1．参 加 児

東京都内の保育園に在籍する年長児58名が調査に参加した．うち，長子22名（男児13名，女児9名，平均月齢：72.41ヶ月，範囲：67-78ヶ月），2人もしくは3人きょうだいの次子20名（男児11名，女児9名，平均月齢：72.25ヶ月，範囲：69-78ヶ月）の計42名を最終的な分析の対象とした．調査に関する説明を受けた保育園の責任者からの代諾を得た上で，いずれの幼児にも調査に参加してもらった．なお，参加児の出生順位は，調査が終了した後に，保育園の責任者より教えて頂いた．浜崎・依田[13]の研究において，中間子の特徴に自制的であることが挙げられていなかったため，本研究ではきょうだいの中で2番目に産まれた子どもを次

子と定義した．よって，本研究では２人きょうだいの次子も，３人きょうだいの次子も，いずれも同じ次子として扱った．

２．材　　料

５つの玩具(ミニカー，クマのパペット，ブロック，コロネパンのキーホルダー，お絵かきボード)，玩具をのせるお盆，絵画語い発達検査[14]の図版と記録用紙，筆記用具，ICレコーダー，ストップウォッチ．

３．手 続 き

園内の静かな個室にて，個別に下記の手続きを下記の固定順で実施した．

⑴　玩具選択

ラポール形成後，実験者は「今日は少しお話を聞かせてもらうね．いろいろお話してくれたら，お礼にこの中の１つの玩具で遊ばせてあげるね.」と教示し，参加児に５つの玩具を提示した．簡単に各玩具の説明を行った後，「この中で○○（参加児名）ちゃんが一番遊びたい玩具はどれ？指をさして教えて下さい.」と問い，選択されたものを「では１番のところに置いておくね.」と言い，お盆の上の１番の番号が書かれた場所に置いた．この手続きを繰り返し，遊びたい順に玩具をお盆の上にのせた．その後，「では，この玩具は最後に貸してあげるから，しまっておくね.」と参加児に伝え，お盆を参加児から見えないところに置いた．

⑵　絵画語い発達検査

実験者は絵画語い発達検査（PVT-R）をその手引きに従って実施した．

⑶　情動制御課題

絵画語い発達検査を実施した後，実験者は「協力してくれてありがとう．よくできました．お礼に玩具を貸してあげるね．はい，どうぞ.」と言い，参加児が５番目に選んだ玩具を渡した．渡した直後に，「遊んでいいよ.」と伝え，参加児の表情を１分間観察した．実験者は玩具を渡すと同時に，片耳につけられたイアフォンにつながったICレコーダーの再生ボタンを押した．このICレコーダーの中には，表情の符号化をするタイミングを知らせる音源が予め録音されていた．

５番目に選んだ玩具を渡されてからの１分間（期待外れ場面）を15秒ずつ（10秒観察５秒記入）の４期に分け，各期の表情を符号化した．表情をポジティブ，ネガティブ，ニュートラルの３つに分類し，各期において一番長い時間表示されたと思われた表情１つを選択し，それを用紙に記録した．唇の両端が後方に引かれ持ち上がっている状態をポジティブとし，眉の内側の両端が上がっている状態をネガティブと定義した．また，このどちらでもないものをニュートラルと定義した．実験者はニュートラルな表情で，参加児の様子を観察するように心掛けた．

観察中に参加児が違う玩具を渡されたことを主張した場合はそこで観察を終了し，参加児に謝罪した上で１番目に選んだ玩具を渡した．主張がなかった場合には，玩具を手渡してから１分後に，「玩具間違っていたね．ごめんね．はい，どうぞ.」と１番目に選んだ玩具を渡した．一番好きな玩具を渡されてからの最初の５秒間の表情を前述の方法でポジティブ，ネガティブ，ニュートラルの３つに分類し，優勢な表情を１つ選択し，それを用紙に記入した．最後に，参加児へのお礼を述べ，調査のことを友達に話さないようにとお願いをした．

４．得 点 化

１分間の期待外れ場面における，各期の優位な表情に１点ずつ与え，いずれも点数範囲が０-４点のポジティブ得点，ネガティブ得点，ニュートラル得点を算出した．さらに，４期を前半２期と後半２期に分け，前半もしくは後半のポジティブ得点，ネガティブ得点，ニュートラル得点を算出した（いずれも点数範囲は０-２点）．期待外れ場面の１分間を前半２期と後半２期に分けたのは，中澤･竹内[5]などの先行研究が，非人気児は人気児より，ネガティブな情動の表出が早いことを示していることから，期待外れの玩具が渡された直後の表情と，しばらくしてからの表情では意味が異なると考えられたためである．

Ⅲ．結　　果

１．統計的検定

以下の全ての検定には，SPSS統計パッケージ21.0を使用した．本調査における有意水準は５％とした．

２．長子群と次子群の等質性の確認

長子群と次子群の月齢および言語能力を比較するために，独立の t 検定を行った．月齢(記述統計に関しては方法を参照：$t(40)=.16$, ns)，絵画語い発達検査の修正得点(長子群：$M=27.09$点，$SD=8.12$，次子群：$M=27.25$点，$SD=7.43$，$t(40)=.07$，ns）の両方に

おいて，この２群に有意な差はなかった．よって，長子群と次子群は月齢及び言語能力において等質であることが確認された．

３．情動制御課題

⑴　期待外れの玩具が渡されたことに対する主張の有無

５番目に選んだ玩具を渡されてからの１分間に，参加児の望んだものとは異なる玩具が渡されたことに対する主張があったのかを調べた．なお，ここでは主張を，言葉や態度によって自分が１番に選んだ玩具との違いをアピールすること（例：「違う」，「もういい」，「５番から？」，玩具を返すなど）と定義した．長子群の７名（31.8%）と，次子群の６名（30.0%）が主張をし，長子群の15名(68.2%)と次子群の14名(70.0%)が主張をしなかった．出生順位(２：長子，次子)×主張（２：あり，なし）の χ^2検定を行ったところ，長子群と次子群における主張の有無の分布に有意な偏りは無かった（$\chi^2(1)=0.02$，ns）．

⑵　期待外れ場面における表情

違う玩具が渡されたことを主張しなかった参加児の，期待外れ場面における表情が出生順位によって異なるかどうかを調べるために，出生順位（２：長子，次子)×性別(２：男児，女児)の分散分析を行った(いずれも被験者間要因)．その結果，ポジティブ得点では出生順位の主効果が有意で($F(1,25)=6.72, p<.05$)，長子群より次子群で得点が高かった(図１)．ニュートラル得点では出生順位の主効果が有意な傾向にあり($F(1,25)=3.11$，$p<.10$)，長子群が次子群より得点が高い傾向が見られた（図１）．

前半ポジティブ得点では出生順位の主効果が有意で($F(1,25)=4.61$，$p<.05$)，長子群より次子群で得点が高かった(図２)．後半ポジティブ得点では出生順位の主効果が有意で($F(1,25)=6.37$，$p<.05$)，長子群より次子群で得点が高かった(図３)．後半ニュートラル得点では出生順位の主効果が有意な傾向があり（$F(1,25)=3.38$, $p<.10$)，長子群が次子群より得点が高い傾向にあった(図３)．その他の得点に関しては，出生順位の有意な主効果は見られなかった．全ての得点において性別の主効果，出生順位×性別の交互作用はいずれも有意でなかった．

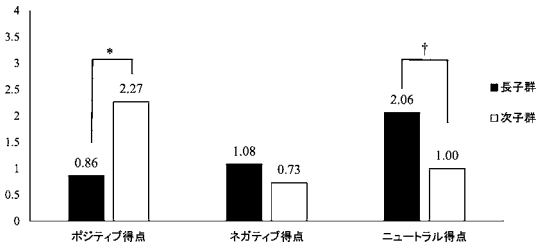

図１　全４期の出生順位別の表情得点（最大４点）
$^{\dagger}p<.10$，$^{*}p<.05$

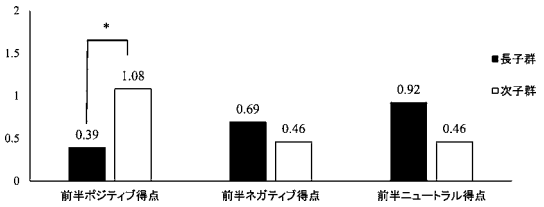

図２　前半２期の出生順位別の表情得点（最大２点）
$^{\dagger}p<.10$，$^{*}p<.05$

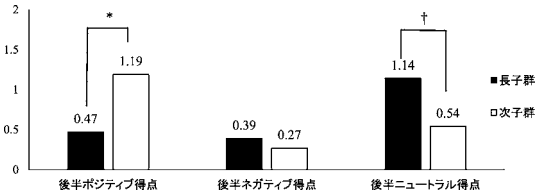

図３　後半２期の出生順位別の表情得点（最大２点）
$^{\dagger}p<.10$，$^{*}p<.05$

⑶　デブリーフィング場面の表情

１番に選んだ玩具を参加児に渡して，デブリーフィングを行ったときの最初の５秒間の優勢な表情をポジティブ，ネガティブ，ニュートラルのいずれかに分類した結果を表１に示す．出生順序(２：長子，次子)×表情(２：ポジティブ，ニュートラル)の χ^2検定を行ったところ，デブリーフィング時の表情の分布に関して，長子群と次子群で有意な偏りがあった（$\chi^2(1)=6.45$，$p<.05$)．残差分析によると，長子群より次子群でポジティブな表情をした子どもが多く，長子群より次子群でニュートラルな表情をした子どもが多かった($ps<.05$)．

表１　出生順位別のデブリーフィング時の表情

		人数	(%)
長子群	ポジティブ	12	(54.5)
	ネガティブ	0	(0.0)
	ニュートラル	10	(45.5)
次子群	ポジティブ	18	(90.0)
	ネガティブ	0	(0.0)
	ニュートラル	2	(10.0)

Ⅳ．考　　察

本研究の目的は，出生順位によって幼児の情動制御に違いがあるのかを検討することであった．本研究において，長子群と次子群の約１/３の幼児が，それぞれ期待外れの玩具を渡されたことを主張し，主張に関しては両群とも同じような傾向を示した．一方で，主張をしなかった幼児のその後の１分間の表情には出生順位によって違いが見られ，期待外れ場面において長子は次子よりポジティブな表情をすることが少なく，ニュートラルな表情をすることが多い傾向があった．さらに，望まない玩具を渡されてからの１分間を２つに分けたところ，前半と後半ともに長子は次子よりポジティブな表情が少なく，後半では長子が次子よりニュートラルな表情をすることが多い傾向にあった．１番に選んだ玩具を渡されたデブリーフィング時の表情に関しても出生順位による違いがあり，長子群では次子群よりニュートラルな表情をした子どもが多く，次子群では長子群よりポジティブな表情をした子どもが多かった．

このように，期待外れの玩具を渡されたことに対する主張や，ネガティブな情動の表出に関しては出生順位による違いは見られなかったものの，それ以外の情動制御の方略は出生順位によって異なっていた．長子は次子よりも実験者に対して特定の情動価を持つ表情を示すのを抑制することで，次子は長子よりも本心とは異なるだろうポジティブな表情することで，それぞれ情動を制御した．先述したように，「自制」とは一般的に，自分の感情や欲望を「抑える」ことと定義されている[11]．ゆえに，本研究の結果は，小学校中学年から中学生の長子が次子より自制的であることを示した依田・深津[8]や依田・飯島[9]の結果を拡張し，５，６歳頃から長子は次子より情動の表出を抑制しやすく自制的であることを表したものだと言える．

一番に選んだ玩具を渡された場面でさえも，長子群では次子群よりも情動の表出を抑制した幼児が多かったという本研究の結果は，長子が次子に比べて，適応的な情動制御を行いにくいという可能性を示唆している．慢性的に自分の情動を抑え込んでしまうことは，精神的ストレスを高める危険性がある[2]．ゆえに，養育者を中心とする大人達は，一貫して情動の表出を抑えこんでしまいがちな長子に対して，時と場合によっては素直に情動を表出しても良いことや，無理なく気分を紛らわす方法を教え示してあげる必要があるだろう．Eisenberg et al.[15]は，母親のポジティブな情動の表出のしやすさは，子ども（４－６歳児）の情動制御を媒介として，子どもの攻撃的行動を含む外在的問題行動の少なさや，不安・抑うつなどの内在的問題行動の少なさ，さらには仲間からの人気度を含む社会的コンピテンスの高さを予測することを示している．自らの情動を一貫して抑制しやすい長子に対し，周囲の大人がモデルとなって適応的な情動制御の仕方を見せることは，長子の情動制御をより洗練された，健康的なものへと発達させるだろう．

本研究において，長子より次子で期待外れ場面においてポジティブな情動を表出をすることが多かったことは，長子より次子が「嬉しくない物であっても，人には感謝を表すべきだ」という社会的表示規則をよく習得していたことを反映しているのかもしれない．期待外れのプレゼントを受け取っても，ネガティブな情動の表出を抑えて，ポジティブな表情を表出するという社会的表示規則は，少なくとも４歳までには使用可能であることが明らかにされている（Cole[16]）．白佐[7]は，次子は年上のきょうだいの行動やそれに対する周囲の大人の評価を見て，適切な行動の仕方を学ぶ機会を多く得ることができると論じている．ゆえに，次子は年上のきょうだいの情動制御の方略とそれに対する周囲からの評価を見て，年上のきょうだいの方略が適切なものではないことを学習しているのかもしれない．

しかしながら，本研究では，幼児の出生順位が，何を媒介として，彼らの情動制御の違いをもたらしているのかを検討できなかった．ゆえに，次子が年上のきょうだいとの関わりから，どのように社会的表記規則を学んでいるのか，さらに，それが彼らの情動制御にどのように影響しているのかは明らかではない．実は，本研究では，媒介となり得る別の要因として，長子に対する養育者の役割期待を反映する，養育者の長子への呼称方法についても調べていた．デブリーフィング時において，養育者の長子に対する呼称方法を参加児に尋ねたが，出生順位を意識させる普通名詞（例：お姉ちゃん）で呼んでいる家庭は１件（2.4％）しかなかった．ゆえに，出生順位による幼児の情動制御の違いをもたらす媒介要因を検討することは，今後の重要な課題である．

文　　献

１）Thompson, R., A. (1994) Emotion regulation: A

theme in search of definition, Monographs of Society for Research in Child Development 59 : 25-52.
2）金丸智美（2014）情動調整（制御）とは何か：よくわかる情動発達（遠藤利彦・石井佑可子・佐久間道子編），p. 80-81，ミネルヴァ書房，京都.
3）Bridges, L., J., Denham, S., A., & Ganiban, J., M. (2004) Definitional issues in emotion regulation research, Child Development 75 : 340-345.
4）Cole, P.M., Zahn-Waxler, C., & Smith, K., D. (1994) Expressive Control During a Disappointment : Variations Related to Preschoolers' Behavior Problems, Developmental Psychology 30 : 835-846.
5）中澤　潤・竹内由布子（2012）幼児におけるネガティブ情動の表出制御と仲間関係，千葉大学教育学部研究紀要 60：109-114.
6）Berline, L., J., & Cassidy, J. (2003) Mothers' self-reported control of their preschool children's emotional expressiveness : A longitudinal study of associations with infant-mother attachment and children's emotion regulation, Social Development 12 : 477-495.
7）白佐俊憲（2004）きょうだい関係とその関連領域の文献集成　Ⅱ．論文紹介編，川島書店，東京.
8）依田　明・深津千賀子（1963）出生順位と性格，教育心理学研究　11：239-246.
9）依田　明・飯嶋一恵（1981）出生順位と性格，横浜国立大学教育紀要　21：117-129.
10）宮下一博（1998）質問紙法による人間理解：心理学マニュアル質問紙法（鎌原雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤潤編），p. 1 - 8，北大路書房，京都.
11）新村　出編（2008）広辞苑（第四版），岩波書店，東京.
12）中澤　潤（2010）幼児における情動制御の社会的要因と文化的要因－情動の表出制御の状況比較および日米比較－，千葉大学教育学部研究紀要　58：37-42.
13）浜崎信行・依田　明（1985）出生順位と性格(2)：3人きょうだいの場合，横浜国立大学教育紀要　25：187-196.
14）上野一彦・名越斉子・小貫　悟（2008）PVT-R 絵画語い発達検査，日本文化科学社，東京.
15）Eisenberg, N., Gershoff, E., T., Fabes, R., A., Shepard, S., A., Cumberland, A., J., Losoya, S., H., Guthrie, I., K., & Murphy, B., C. (2001) Mothers' emotional expressivity and children's behavior problems and social competence : Mediation through children's regulation, Developmental Psychology 37 : 475-490.
16）Cole, P., M. (1986) Children's Spontaneous Control of Facial Expression, Child Development 57 : 1309-1321.

（平成27年 9 月11日受付
平成27年12月16日受理）